

樹の花

河辺いきものの森には約 100 種類の樹木が生育している。整備される以前の森は、その見かけ上の違いからケヤキ林、コナラ林、アラカシ林、スギ林、竹林の 5 種類の林から成り立つとされていたが、手を入れはじめて 8 年目の今はだいぶ林相も変わってきている。25 パーセントを占めていた竹林は、草原広場やネイチャーセンターの敷地などになったため、ぐんと狭められたし、植林されたと見られるスギ林は平成 6 年頃から始まった立ち枯れ現象でほとんど消滅してしまった。アラカシ林も林床を明るくする目的でその多くが伐採され、だいぶ面積が少なくなっている。その反面多くの落葉樹をふくむコナラ林はこの森の 3 分の 2 を占めるほどに広がってきている。さて今回はそのような状況にあるこの森の樹に咲く花を紹介したい。

1. 桜の仲間

① ヤマザクラ

この森には 4 種類の桜が生育しているが、その中で一番早く花をつけるのがヤマザクラである。早い年は四月のはじめに咲き始める。ソメイヨシノほどの派手さはないが、えんじ色の新葉と薄いピンクの花が同時に展開する様はえもいわれぬ風情があって昔から多くの人に好まれてきた。高さ 25 メートルにもなり樹の寿命も長いといわれるがこの森にはそんな大木はなく、若い木ばかりでまたその数も少ない。



ヤマザクラ

② カスミザクラ

樹形も、葉や花の形もほとんどヤマザクラと変わらないが、咲く時期が約 2 週間ほど遅いのでヤマザクラと区別されるカスミザクラがこの森には多い。高木の梢に咲くこの桜は、森から少し離れて眺めると、霞桜とはよくいったものだとその名の由来が理解できる。ヤマザクラとカスミザクラの形態上の違いは、葉柄と花柄に毛があるのがカスミザクラということで区別している。



カスミザクラ

③ ウワミズザクラ

幹の樹皮には横縞の模様もなく、花も桜の概念からはほど遠い形をしているが、これも桜の仲間である。20 ㍎にもなる大木で、4 月の中頃新葉がひらいてから、今年出た枝の先に白い小さな花を穂状につけ、長さ 6 ～ 8 ㍎ほどの小さなブラシのように見える。花が終わると直径 7 ミリほどの丸い実ができ、熟すにしたがって赤から濃いえんじ色へと変わっていく。



ウワミズザクラ

④ イヌザクラ

ウワミズザクラより花は少し遅れるが、まったく同じような花をつけるのでたいていの人は見分けがつかない。しかしよく見ると、前の年に出た枝から花柄を出して花をつけているので見分けがつく。この森には 20 ㍎を超す大きなイヌザクラの木があるが、花をつけない年もあるようである。



イヌザクラ

2 ツツジの仲間

① ヤマトツツジ

この森でただ 1 本、コナラ林の中に高さ 2 メートルばかりのヤマトツツジが残っていた。アオキやアラカシにおされて息も絶え絶えで花もつかない状態だったが、覆いかぶさっていた常緑樹を切り払ったところ、翌年から見事に復活してたくさんの花をつけはじめた。1 本だけでは寂しいと思っていたところ、その足元に実生の幼木が育ち始めていて皆を喜ばせている。



② モチツツジ

アカマツ林だった頃の名残なのかモチツツジがあちこちにあって結構大きな株を張っているが、ヤマトツツジと同じように花は数えるほどしかついていなかった。しかし林床が明るくなると皆申し合わせたよう

に息を吹き返し、どんどん花をつけるようになった。この花は直径5センチもある大きな紅紫色の花で、濃い紫色の反転があって美しい。がくの部分には粘質の腺毛があってよく粘り、これがその名前の由来となっている。



③ミヤコツツジ

ヤマツツジとモチツツジの雑種だといわれているツツジで、きわめて珍しく、この森にも一株しかない。花はモチツツジより一週間ほど遅れて咲く。モチツツジの株のすぐ隣に生えているが、その近くにヤマツツジはない。花はモチツツジと同じくらい大きいですが色は澄んだ紅紫色で、モチツツジよりも美しい。がくや若葉に粘りはなく葉や若枝の毛も少なく、名の通り上品な感じのツツジである。



3 ヤブツバキ

森のあちこちに若い木はたくさんあるが大木は少ない。しかし「ケヤキの林」と呼んでいるあたりには樹齢数十年、高さ10メートルほどの大木が3本あり春にはたくさんの花をつける。とはいっても樹上の花は高すぎて、仰ぎ見る程度だが、晩春の頃に樹下に展開される花むしろは見事である。年明けからぼつぼつ花を咲かせて早春の花のように思われがちだが、満開となるのは春4月である。



4 タニウツギ

桜もツツジも終わった頃に、鮮やかなピンクの花をしなだれつけるのはタニウツギである。本来は標高300メートル以上の谷沿いに咲く山地性の植物である。樹高3メートル足らずの低木で幹は根元で枝分かかれして株立ちとなり大木になることはない。この森では日当たり

ヤブツバキ

のよい草原広場でススキやウドなどの高茎草本に混じって散在している。花後にできる果実がゴマとよく似ているので、愛知川上流の里人たちはこの木を「ごまがら」と呼んでいる。



5 エゴノキ

最近では庭木としてもよく使われるようになった落葉小高木で、濃紫褐色ですべすべした美しい樹皮は一年

タニウツギ

を通して楽しめる。五月～六月にかけて、

直径

2.5センチメートルばかりの純白の花が、小枝の先から伸びた長さ2～3 cmの柄の先にぶら下がるようにしてうつむいて咲く姿はなん

とも可憐である。花の後にできる長さ1 cmばかりの緑色の果実は、秋には熟して皮が裂け、中から濃い褐色の種子が現れる。昔は花よりもその果実の方が人との関わりが深かった。果皮にはサポニンがふくまれていて、若い実を石けん代わりに洗濯に使ったり、すりつぶして川にまき、魚とりに使われたりした。



しかし今はヤマガラのような小鳥たちの エゴノキ

格好の餌となっているだけで、この実と人との関わりは薄れてしまっている。

6 テイカカズラ

五月から六月にかけて咲く森の花はなぜか白い花が多い。ガマズミ、ウツギ、テイカカズラ、イボタノキ、カマツカ、ヤブデマリなどは皆この季節の花である。これらの中で一つ取り上げるとすればやはりテイカカズラをおいて他にない。つる草で、付着根を出して他のものにまとわりついて伸びていく。地面を這っている茎の葉は非常に小さいが、ひとたび木などに登り



テイカカズラ

始めるとたちまち大きな葉をつけるようになる。5月頃上部の枝先や葉腋に純白で芳香のある花をつける。白い花は後に淡黄色になって散っていく。花はクチナシの花とよく似た形で、花冠の径は2～3 cm、先は5つに裂けていてスクリュー状にねじれる。花後に長さ15～20 cmもあるササゲ豆のような巨大な実をつける。熟すと裂けて

多くの種子を飛ばす。種子は細長く先に 3 cm ほどの冠毛があり、秋から冬にかけて、風にのって散らばっていく。この花の名前は昔の歌人藤原定家からとったという話は余りにも有名である。

7 ネムノキ

夜になると、2 回羽状複葉の小葉を閉じて、ちょうど眠っているように見えるのでつけられた名前がネムノキ、しかし雨の日などは一日中朝起きることをせず、眠ったままのことがある。



この木は陽樹であるため暗い森には育たない。河辺いきものの森でも、最初は林縁に僅かに見られるだけだったが、最近森の中にも幼樹が育ってきている。このあたりで ネムノキ は祭礼の太鼓の撥の材料としてなくてはならない木なので、村人たちは特別な思いを込めて大切に育てている。

六月から七月にかけて、咲く花は一応がくも花びらもめしべもあるが、おしべだけが目立つ特異な花である。おしべの花糸と呼ばれる部分が 3 ~ 4 cm と長く、淡紅色の細い糸でつくった房のように見える。また葉は夜になると眠るが、花は夜になると開くというのもおもしろい取り合わせである。

8 カエデの仲間

花はさほど目立たないが、秋には美しく紅葉してこの森を飾り立てるカエデの仲間を紹介したい。

① イロハモミジ

この森には「モミジの林」と呼んでいる一角がある。落葉樹林の中で特にイロハカエデの密度の高かった一角を意図的に管理して作り上げた林で、純林とまではいえないが、その 90 % 以上をイロハモミジが占めている。このあたりにイロハ



イロハモミジ モミジが多いのはなぜだろうと調べたところ、その片隅に樹齢数十年、高さ 15 メートルほどの親木があり、ここから種がばらまかれたらしいということがわかった。

② イタヤカエデ

モミジの林からほど遠からぬ所に樹高 20 m を超すかと思われる三本立ちのイタヤカエデの大木がある。まわりにあるコナラやアベマキの林をはるかに突き抜けてそびえる 3 本の木は、株立ちであるため、正確には 1 本というべきかもしれない。

あまり切れ込みの深くない葉の周囲には鋸歯がないのがこのカエデの特徴である。秋には鮮やかな黄色に色づいて年に一度の自己主張をするこのカエデも、この森の秋を飾り立てる一員である。

この森でただ1本、かろうじて生き残ってきたこの山地性のカエデも、林床に入り込む光がふえたためか、いま盛んに自分の子どもたちを育てていて、もう何年かすればこのあたり一帯がイタヤカエデの林に変わるかもしれない。

③エンコウカエデ

この森で見つけた3番目のカエデがこのエンコウカエデである。たくさん自生しているケヤキの幼木を育てて将来はケヤキの林にしようという計画のもとに下草



イタヤカエデ

刈りなどを行っているのが現在の「ケヤキの林」だが、その中のウワミズザクラやアズキナシの大木が生えている一角に30 cmほどのカエデの幼木が発見された。葉の形からどうもエンコウカエデらしいということで大切に世話をしているが、現在ようやく1 mほどに伸びてきている。一ヶ所に10本ほど生えているのだが、種子がどこからやってきたのか今のところ不明である。エンコウカエデはイタヤカエデの変種で、葉の切れ込みが極端に深く、ちょうどテナガザルの手のひらのように見えるのでその名がつけられたといわれている。ちなみにエンコウは猿候で手長猿のことである。

おわりに

今回は木の花を紹介しようということでいくつかをあげてみたが、まだまだたくさんあってとても紹介しきれない。誌上で紹介できるのはほんの一部だけである。もし機会があれば森へ来ていただいて、彼らの生きている姿を直接見てもらうことができれば非常にありがたいと思います。